

## ライオンズクラブ心の復興プロジェクト 震災復興心理・教育臨床センター活動報告

柴田 理 瑛<sup>1</sup>  
平野 幹 雄<sup>2</sup>  
西浦 和 樹<sup>3</sup>  
足立 智 昭<sup>3</sup>

### 1. はじめに

ライオンズクラブ心の復興プロジェクト「震災復興心理・教育臨床センター(EJセンター)」は、東日本大震災の被災者やその支援者(心理士、保育士、教師等)の抱える心の問題を継続して支援することを目的として開設した組織である。EJセンターは、2011年9月24日に国際基督教大学高等臨床心理学研究所と宮城学院女子大学発達科学研究所のジョイントプロジェクトとして宮城学院女子大学の中に開設された。これまでに被災者や支援者の皆様に対する個別相談、サポートグループ、種々の心理教育的なプログラムといった無料の臨床サービスを、宮城学院女子大学を主な会場として提供してきた。2011年9月から2012年11月までは土曜日の10:00から16:30まで毎月2回実施したが、その後アウトリーチ活動の増加などから月1回の開催に変更して活動を続けてきた。現在は、午前中を支援者のための事例検討会とし、午後は心理教育的プログラムとサポートグループの実施を行っている(6.参照)。

近年は、県内外の他機関との連携も広がっており、2015年5月には、福島復興心理・教育臨床センターと共催プログラム(福島市民活動フェスティバル2015)を行い、2015年8月からは東北福祉大学の東口キャンパスにおいてもプログラムを実施するようになった。アウトリーチ活動におけるスーパーバイズ、ライオンズクラブをはじめとした民間団体や宮城県議会などの公的機関にお

ける講演なども行うようになっている(表1、2)。震災後5年を経過するにあたり、本稿では、EJセンターのこれまでの活動の総括として、宮城県内の抱える諸問題について検討を行い、特に保育・幼稚園における間接支援の重要性について述べたい。

表1 EJセンターのプログラムが開催された地域と延べ参加人数を示す。

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
石巻市	0	0	15	148	111
岩沼市	0	0	0	16	44
気仙沼市	0	0	0	25	69
塩釜市	0	0	0	22	0
仙台市	111	428	518	693	749
多賀城市	0	0	0	0	124
名取市	0	0	0	4	149
東松島市	0	0	0	0	70
大崎市	0	0	0	0	38
柴田町	0	0	0	0	38
登米市	0	0	0	0	38
利府町	0	0	0	0	38
天童市	0	0	0	0	60
米沢市	0	0	0	0	100
福島市	0	0	30	88	72
郡山市	0	0	0	0	87
南相馬市	0	0	0	0	110
栃木市	0	0	0	146	0
合計	111	428	563	1142	1897

注)2014年度から仙台市外での活動が急増し、全体の参加人数も1000名を超えている。

1. 本学非常勤講師(東北福祉大学)  
2. 本学非常勤講師(東北文化学園大学)  
3. 宮城学院女子大学

表2 EJセンターにおける利用項目別の延べ参加人数を示す。

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
仮設訪問	0	0	0	4	0
研究会・シンポジウム	0	0	0	0	62
講義	0	155	242	669	1072
個別相談	0	32	23	15	13
心理教育的プログラム (教育的対話, SMG, SET など)	111	239	287	438	392
保育補助	0	0	0	0	170
事例検討・スーパーバイズ	0	2	11	16	188
合計	111	428	563	1142	1897

注)2014年度より、EJセンタースタッフによる講義への参加者が増えている。

## 2. EJセンター利用動向と宮城県内の諸問題について

2011年のEJセンターの利用者数は延べ111名であったが、2013年の利用者数は延べ500名を超え、2014年には延べ1142名、2015年には延べ1833名と、震災後しばらくしてから利用者数が大幅に増加する傾向が見られた。先述のように、2014年以降外部からの講義(心理教育)依頼や沿岸保育所のスーパーバイズが増えており(表2)、震災後5年を経て心の問題に関連した心理教育や講演のニーズは高まっているようである。

宮城県の大人を対象とした調査は、震災後2ヶ月で失業者数が前年比2.40倍にも達したこと(厚生労働省、2011年)、離婚率は2013年をピークに現在は下降していることなどを報告している(宮城県庁、2014)。また、家庭内暴力(DV)の認知件数は震災前の2010年から全国ワースト1位を毎年更新し続けており(河北新報、2016年1月13日)、特に、2011年には前年比1.03倍であったDVの認知件数が2012年には前年比で1.30倍もの件数になっている(宮城県庁、2013年)。宮城県の震災前後の沿岸市町と内陸市町村の自殺死亡率の推移を見てみると、2011年3月から2012年2月までの間に、沿岸部の男性で前年比-13.2%と低下したものの、2013年3月から2014年2月までには前年比+5%に上昇している(仙台市役所、2014)。

大人だけでなく子どもたちにおいても、震災後

しばらくしてから不登校、いじめ、暴力行為等の件数が増えている。本県における中学校の不登校率は、2012年、2013年と全国ワースト1位、2014年は全国ワースト2位であった(河北新報2015年8月7日)。いじめの認知件数は、小・中・高における発生が全国2位、同様に小・中・高における暴力行為の発生は東北6県で突出した発生件数であった(河北新報2015年10月28日)。

阪神淡路大震災後における被災者の心の状態を調査した研究は、災害後に抱える心の問題について次の3つに分類している。①災害による生命の危機、悲惨な体験による心的外傷後ストレス障害(PTSD)、②災害による家族や友人の死、家財の喪失によるうつ、悲嘆、③①、②のような災害による直接の生活変化ではなく、災害後の仮設住宅への居住や離職といった二次的な生活変化によるうつ病、不安障害、アルコール依存、適応障害などである(加藤・最相、2011)。失業、離婚、配偶者や近親者の死といったライフイベントは非常にストレスが高いことから(Holmes & Rahe, 1967)、震災後の離職率の高さ、DVの認知件数や離婚率の増加、仮設住宅への長期に渡る居住などといった現状と照らし合わせると、本県では③の二次的な生活変化によるストレスが依然高い状態にあると考えられる。

一方、子どもの心の状態については、阪神淡路大震災から7年後の調査において、保護者のスト

レスが高いと子どものストレスも高いという関係があったこと(加藤・最相、2011)、子どもは親に依存して生きているため、親の抱えるストレスから逃れることができないこと(安、2011)などが指摘されている。我々も、津波の被害が甚大であった沿岸地域の保育所における事例検討を通じて、震災後に生まれた幼児の問題行動が顕著になっていることを確認している。震災後に生まれた幼児は、震災や津波を直接に体験しているわけではない。震災によって心に問題を抱えた養育者に接することによって、二次的に不適応行動が増えている可能性が考えられる。

以上のことは、宮城県が依然高いレベルのストレス状態にあること、震災を体験していない世代にも心の問題が生じている可能性を示唆している。高いストレス状態とうつ病には実質的な因果関係が認められることが知られており(Kendler, Kar-kowski, & Prescott, 1999)、今後、宮城県におけるうつ病の増加が懸念される。乳幼児期の子どもの心のケアについては、一部の自治体を除き、保育所・幼稚園についてスクールカウンセラーのような制度や巡回相談のような制度がないこともあり、これまでの対応が十分であったとは言い難いだろう。このような考察と様々な現場の専門家の考えや危機感が一致しているかは定かではないものの、EJセンターへの依頼はここ2年で確実に増えている。

### 3. 間接支援や二次的な被災者に対する心の復興支援と心理教育

これまで、EJセンターでは被災地の中核病院で心理士として働く卒業生や、スクールカウンセラー、学生相談室で働いている卒業生などを対象としたスーパーバイズと、本学学生や卒業生、あるいはその同僚などを対象とした心理・教育プログラムを提供してきた。開設当初の活動から①被災者の支援を行っている支援者自身が二次的、二次的に心的外傷を負っている場合があり、支援者も心の重荷を下ろすことのできる居場所を必要としていること、②大学卒業後、保育士、教師、心

理士を目指す学生の中に、被災者支援のための心理教育に対する高いニーズが存在すること、③直接被災しなかった学生の中に、心理的ケアが必要なほどの強い罪悪感に苛まれている学生や、過覚醒の学生がいることなどが明らかになった(足立、2012)。

現在までの活動を振り返ると、①から③までのような利用者に対する心理教育的プログラムや個別相談の結果、数年にわたって利用されている方が、ご自身の震災に関連した心的外傷体験についてようやく語り始めることが多くあった。これらの事例に共通することは、「いつもの作業でこのメンバーになら話してみよう」といったような感覚が大きく影響しているものと思われた。心の復興支援を行う際には、心理教育的プログラムを単発で提供して終了としたり、毎回異なる支援者が支援をしたりするのではなく、同じ支援者が継続して関わっていくことの重要性を示唆している。EJセンターにおいては、臨床的な心の復興支援だけでなく、学術的な場面における活動も徐々に増えてきた(業績一覧参照)。2014年には、フレデリックJ.スタッダードJr.、クレイグL.カツ、ジョセフP.メリーノ、アメリカ精神医学振興協会編集の“Hidden impact: What you need to know for the next disaster.”を翻訳し、『不測の衝撃—危機介入に備えて知っておくべきこと』という邦題で出版した。主に災害後の心の復興支援に携わる人々に向けて、次にくる災害へどのように準備し、どのように支援していくかについての視点を紹介したものである。この本の第3章 p.20には「災害の準備の要点とは、災害に備えることである！これには自分のセルフケアと同様に家族のケアもある。」と述べられており、20章 p.158にはスタッフの支援(間接支援)について述べられている。すなわち、支援者は被災者を支援するにあたって、まずは自分と家族を含めた物理的・心理的安全を確保することが重要であり、初期のEJセンターの活動によって明らかになったように、支援者の心の復興支援をすることで支援者の精神的健康を保つ必要があるということは、

少なくともアメリカではスタンダードな考え方に なっていることが読み取れる。このような間接支 援や二次的被災者への心の復興支援に対する重要 性については、日本心理学会や国際力動的心理療 法研究会においても報告を行っており(業績一覧 参照)、2016年は第31回国際心理学会議(ICP2016) において発表を行う予定である。

#### 4. 2015年度幼稚園・保育所への巡回サポート事業

最近、子どもの扱いに不慣れな学生が多く、子 どもとの触れ合いの機会をできるだけ多く持つこ とができるように、宮城学院女子大学発達臨床学 科では多くの保育ボランティアの機会を提供し、 教員が引率する中での保育ボランティア活動を行 ってきた経緯がある。しかしながら、東日本大 震災以降、復興支援は数多く実施されるものの、 震災前に比べると、子どもたちの生活を中心とし た保育活動が十分に行われているわけではない。 その理由は、震災以降の保育士不足や外遊びが制 限されてきたことが挙げられる。このような事情 から、放射線の影響が大きかった地域での保育ボ ランティアの受け入れ自体が難しい状況にあった。

そこで、2015年の秋、本学発達臨床学科が加 盟するキリスト教保育連盟(東北部会、武田健氏 (第一光の子保育園長))からの協力要請を受けて、 セントポール幼稚園(郡山市)と原町聖愛保育園 (南相馬市)への巡回サポートを企画し、事前に 必要とされる事項の聞き取り調査を行った。そこ で明らかになったことは、(1)保育ボランティア 学生の派遣、および(2)子育てに関する保護者相 談、を専門的な視点から実施してほしいという要 望であった。加えて、(3)放射線量の自動測定に ついても要望があり、保育の環境整備のための人 員が慢性的に不足している現状が見て取れた。

こうした現状を踏まえて、両園の抱える現状と 課題について、参加学生に対してインフォームド コンセントを行い、11月16日(月)にセントポー ル幼稚園、11月21日(土)に原町聖愛保育園に巡 回サポートを実施した。

セントポール幼稚園では、保育ボランティアを

希望する学生6名が保育補助として、環境整備を 行った。具体的には、保育が始まるまでの時間を 利用して、保育者が毎日行っている除染(床の水 拭き)や各部屋と廊下の清掃活動を行った。その 後、満3歳児保育室から5歳児保育室に分かれて、 保育活動に参加した。その間を利用して、引率教 員2名が、子どもの発達と子育て不安をもつ親に 対して保育相談を行った。

園長先生の言葉を借りると、次の通りである。 保育補助が無ければ、保育者一人ひとりが子ども たちとじっくりと向き合う時間をもつことが難し かった。保育ボランティアのおかげで、子どもた ちとの遊びや身支度の手伝いなどを通して、子ど もたちの喜びと笑顔が見られた。また、保護者本 人の精神面での相談に対して、園だけでの対応が 難しい状況が出てきた場合であっても、専門家の 派遣によって、保護者自身が前向きに進むことが できるようになっている。このことから、今後も保 育補助と保護者相談を継続実施する必要性を感じ た。

原町聖愛保育園では、保育ボランティアを希望 する学生9名が保育補助として、園庭の清掃活動、 子どもたちのお世話と昼食の準備、クリスマス用 のリース作りなどの活動に参加した。午前中の清 掃は、園庭の中心にあるシンボルツリー(梅檀 の木)からの落ち葉の清掃活動が中心で、ここ でも環境整備には、かなりの労力が必要な作業で あることを実感した。

また、保育ボランティアの学生が入ったことで、 いつもと違った雰囲気の中での昼食となった。特 に、子どもたちは話しかけられると嬉しくなり、 さらに自分から話しかけようとする様子を見て、 子どもたちが自分で考えて話をするには、家庭や 園での食卓を囲んでのコミュニケーションを工夫 することが必要であることを痛感した。

なお、今回の巡回サポートの詳細については、 キリスト教保育連盟の「放射線・震災特別委員会 活動報告書#10(2015年12月16日発行)」を参照 されたい。

## 5. 今後の展開

震災から5年が経過しようとしている。心の問題が長期化するなかで、様々な支援組織が孤軍奮闘しながら、これからも心の復興支援を続けようとしている。EJセンターにおける支援者の支援を通じて実感していることは、各現場における専門家が自分たちの支援内容についてのスーパーバイズを受ける機会に乏しく、今も手探りの状態で支援を続けているという実態である。同じ支援者が継続して心の復興支援を続けるだけでなく、支援内容をスーパーバイズすることのニーズが高まっている。とりわけ保育所、幼稚園の専門職向けの心の復興支援に関する研修機能は各市町村において確立していない。今後EJセンターでは、これまでの経験を活かしつつ、最前線で活動する専門家らのスーパーバイズにも力を注いでいきたいと考えている。支援内容のスーパーバイズを通して、EJセンターの5年間の活動によって蓄積された知識を伝えていくことが、日々の支援あるいは次の災害に対する備えになると考えている。

## 6. 付録(2015年度新規開催の心理教育的プログラム)

これまで卒業後、保育士、教師、心理士を目指す学生を対象に、「教育的対話」、「自我起動鍛錬プログラム(socio-energetic training: SET)」のセミナーや、「サポートグループ」などのプログラムを実施した。教育的対話、SET、サポートグループについては、2012年度の報告をご覧ください(足立、2012)。ここでは震災復興心理・教育臨床センターのホームページより(<https://ejcenter.wordpress.com>)、新たに加わったプログラムを紹介する。

1) ストーリー・メイキング・グループ(story making group: SMG) : SMGとは、自身の人生の物語を誇りを持って紡ぐことが妨げられている人に、その心の機能を回復させ、そのことの意味を実感し、人の中で自分らしくいられるようになるためのプログラムである。SMGは、集団精神療法の理論・技法を構造化した、

その目的によっては困難患者へのプレセラピーにも、アイデンティティを追求するアイデンティティグループにも、あるいは PTSD の治療にも応用可能なアクティビティグループセラピーである。技法が構造化されているために、初心のセラピスト、教師など集団精神療法の技法や技術を熟練していなくても安全に実施できる技法である。

2) グローバルリーダーシップ : 初めて会った人ともすぐに率直に議論ができ、与えられた仕事にチームワーク能力を発揮でき、先輩、教授、あるいは社会における目上の人にも、ものおじすることなく、自己表現をし、共に働く仲間同士で創造的にリーダーシップを発揮できる自分になる出発のプログラムである。コンダクターは、1970年代にメニンガー研究所で始まった企業トップのためのエグゼクティブコーチング、エスリン研究所で始まった人間の潜在能力を浮上させる Human Potentiality Movement に参加し、精神分析的な人間関係パワー・プログラムを発展させて来ている精神分析的システムズサイコセラピストである。Human Relation Power(人間関係力)は、自分で自分を育てる、創造的变化を図る、心の逞しさとしなやかさを追求し、精神分析の目的とされている「働く能力と愛する能力」を高め押し進めるものである。

## 7. 引用文献

- 厚生労働省職業安定局雇用政策課(2011). 震災による雇用の状況(速報値)(5月18日), <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200001cjik.html>(参照2016年2月4日).
- 宮城県庁保健福祉部保健福祉総務課(2015). 宮城県平成26年人口動態統計, <http://www.pref.miyagi.jp/site/toukei/h26kakutei-.html>(参照2016年2月4日).
- 宮城県庁環境生活部共同参画社会推進課(2013). 女性と子どもの安全・安心社会づくり懇談会(5月18日). 資料6 DV被害の現状—宮城県, <http://www.pref.miyagi>.

- jp/uploaded/attachment/219158.pdf(参照2016年2月4日).
- 河北新報online news(2016). 虐待・ストーカー・DV相談宮城で最多更新(1月13日), [http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201601/20160113\\_13021.html](http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201601/20160113_13021.html)(参照2016年2月4日).
- 健康福祉局障害者支援課(2014). 仙台市自殺対策連絡協議会(8月27日)資料4 仙台市における自死の現状分析について(人口動態及び警察庁統計より), <http://www.city.sendai.jp/kenkou/shougai/jisatsu/260827/26siryou04.pdf>
- 河北新報online news(2015). <不登校>宮城の中学生改善進まず最悪更新(8月7日), [http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201508/20150807\\_13011.html](http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201508/20150807_13011.html)(参照2016年2月4日).
- 河北新報 online news(2015). <いじめ>東北での認知2万7200件(10月28日), [http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201510/20151028\\_73013.html](http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201510/20151028_73013.html)(参照2016年2月4日).
- 加藤寛・最相葉月(2011). 心のケア——阪神・淡路大震災から東北へ 講談社.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. (1967). The social readjustment rating scale. *Journal of psychosomatic research*, 11(2), 213-218.
- 安克昌(2011). 心の傷を癒すということ——大災害精神医療の臨床報告 増補改訂版 作品社.
- Kendler, K. S., Karkowski, L. M., & Prescott, C. A. (1999). Causal relationship between stressful life events and the onset of major depression. *American Journal of Psychiatry*, 156, 837-841.
- 足立智昭(2012). 国際基督教大学高等臨床心理学研究所・宮城学院女子大学発達科学研究所ジョイントプロジェクト活動報告, *宮城学院女子大学発達科学研究*, 12, 97-98.
- 8. 業績一覧**
- 書籍
- Stoddard Jr, F. J., Katz, C. L., & Merlino, J. P. (Eds) (2010). *Hidden impact: what you need to know for the next disaster: a practical mental health*

*guide for clinicians*. Jones & Bartlett Learning. (フレデリック J. スタッガード, クレイグ L. カッツ, ジョセフ P. メリーノ(編集)小谷 英文 監訳, 東日本大震災支援合同チーム(翻訳)(2014). 不測の衝撃—危機介入に備えて知っておくべきこと. 金剛出版.)

## 論文・著書

- 平野幹雄(2012). 被災者, 遺族, 研究者として東日本大震災からの1年を振り返って—研究者が遺族になって誰に何を相談したか. *臨床発達心理実践研究*, 7, 48-52.
- Kotani, H., Adachi, T., Nishikawa, M., Nakamura, Y., Hige, K., Hashimoto, K., Nishiura, K., Hashimoto, M., Hanai, T., Ishikawa, Y., Sasaki, H., and Ogimoto, K. (2013). Struggling with the Fourth Disaster in East Japan. *Forum (official journal of international association of group psychotherapy and group processes)*, 21, 79-99.
- 平野幹雄(2013). 支援者のバーンアウト. *日本発達心理学会編(2013). 発達科学ハンドブック 7災害・危機と人間*. 149-156, 新曜社.
- 足立智昭・北村喜文・高嶋和毅・細井俊輝・大橋良枝・伊藤雄一・金高弘恭(2014). インタラクティブ・コンテンツを用いた幼児の PTSDと積み木遊びに関する研究—唾液アミラーゼ活性値によるストレス軽減効果の検証を中心に—. *宮城学院女子大学発達科学研究*, 14, 25-30.
- 大橋良枝(2014). 積み木を用いたプレイセラピー技法の心的外傷治療に対する適用可能性. 第18回国際力動的心理療法研究会大会発表論文集, 159-168.
- 小谷英文(2014). 大災害トラウマ/PTSD対応集団精神療法. 集団精神療法の進歩—引きこもりからトップリーダーまで—. 283-310, 金剛出版.
- 小谷英文(2014). サポートグループ東北モデル. 第18回国際力動的心理療法研究会大会発表論文集, 118-135.
- 高田毅・荻本尚子(2014). 絵本の読み聞かせしかり声を出して相互作用の場所, 空間を作る. 第18回国際力動的心理療法研究会大会発表論文集, 169-180.
- 中村有希・小谷英文・伊藤裕子・荻本快(2014). *Socio-Energetic Training (SET)*. 第18回国際力動的心理療法研究会大会発表論文集, 148-158.

- 西川昌弘・足立智昭・森岡あすか(2014). 場所に於いて—ところがはたらく対話の理論と実践に向けて—. 集団精神療法, 30, 78-84.
- 橋本麻耶・花井俊紀・足立智昭・西浦和樹(2014). Story Making Group. 第18回国際力動的的心理療法研究会大会発表論文集, 136-147.
- 細井俊輝, 佐藤裕美, 高嶋和毅, 伊藤雄一, 足立智昭, 北村喜文(2014). 加速度センサを用いた積み木による子供のストレス軽減効果に関する一検討, ヒューマンインターフェイス学会研究報告集, 16, 91-96.(2014年度ヒューマンインターフェイス学会研究賞)
- 足立智昭(2015). 不測の衝撃に答える. 発達障害研究, 37, 44-52.
- 熊坂聡・足立智昭(2015). 東日本大震災における災害弱者と支援者の心理・社会的状況について. 発達科学研究, 15, 19-31.
- 小谷英文(2015). ト라우マ. 新版 カオスと混沌 武蔵とモンロー. 143-150, PAS心理教育研究所出版部.
- 小谷英文(2015). 精神分析的な心理療法 「現代の病態に対する<私の>精神療法」 精神療法増刊第二号. 95-101. 金剛出版.
- 小谷英文・橋本麻耶・花井俊紀・西浦和樹(2015) ストーリー・メイキング・グループの力動的治療機序—東日本大震災臨床事例から—. 集団精神療法, 31(1), 48-57.
- 平野幹雄・神谷哲司・橋本信也・佐竹真次(2015). 東日本大震災後の心の復興支援に被災地域の心理専門職がどのように携わってきたか. 臨床発達心理実践研究, 10(1), 22-30.
- 学会・シンポジウム・招待講演等**
- 平野幹雄(2012). 被災者, 遺族, 研究者として東日本大震災からの1年を振り返る. 日本発達心理学会第23回大会 RT話題提供「被災地の発達心理学者がこの一年間で学んだこと」, 名古屋.
- 平野幹雄(2013). 東日本大震災を経験した心理学者が今浜松の皆さんにお伝えしたいこと. 中村建設株式会社協力会一誠会総会講演, 浜松.
- 足立智昭(2014). 被災地在住の心理学者による 3年間の振り返りを通じて. 日本発達心理学会第25回大会自主シンポジウム「東日本大震災後の継続的な心のケアの必要性について」, 京都.
- 足立智昭(2014). 不測の衝撃に答える. 第49回日本発達障害学会大会企画公開講演, 仙台.
- 足立智昭(2014). 被災地在住の臨床発達心理士が語る今後の課題. 第10回日本臨床発達心理士会災害危機支援委員会企画実践セミナー「東日本大震災とその後の心の復興支援を振り返る」, 札幌.
- 足立智昭(2014). 災害臨床中長期の課題—第3位相の宮城の実態と課題—. 第20回国際力動的的心理療法研究会市民公開災害臨床プログラム「災害臨床中長期の課題」, 郡山.
- 西浦和樹(2014). 東日本大震災による不測の衝撃: 心理的支援の現状と課題. 日本心理学会第78回大会(企画代表者・指定討論者: 西浦和樹, 企画者: 小谷英文・足立智昭, 司会: 足立智昭・西浦和樹, 話題提供者: 平野幹雄, 池田和浩, 田山淳, 須藤康宏, 橋本和典), 京都.
- 平野幹雄(2014). 自身の喪失体験から心的外傷後成長まで. 第10回日本臨床発達心理士会災害危機支援委員会企画実践セミナー「東日本大震災とその後の心の復興支援を振り返る」, 札幌.
- 平野幹雄(2014). 東日本大震災後にある心理学者が経験した心の変容過程—喪失感からPTGに至るまで—. 第20回国際力動的的心理療法研究会市民公開災害臨床プログラム「災害臨床中長期の課題」, 郡山.
- 平野幹雄(2015). 東日本大震災後の心の復興支援に被災地の心理職はどのように携わったのか. 日本発達心理学会第26回大会学会関連企画シンポジウム「東日本大震災後の継続的な心のケアの必要性について2」話題提供, 京都.
- 平野幹雄(2014). 東日本大震災の経験を振り返る—喪失感から PTGに至るまで—. 日本発達心理学会第25回大会自主シンポジウム「東日本大震災後の継続的な心のケアの必要性について」話題提供, 京都.
- 小谷英文(2015). 不測の衝撃. 復興大学公開講座講演, 仙台.
- 西浦和樹(2015). 東日本大震災による不測の衝撃: 心理

的支援の現状と課題(2)。日本心理学会第79回大会  
(企画代表者：西浦和樹，企画者：小谷英文・足立智昭，司会：足立智昭・西浦和樹，話題提供者：橋本和典・平野幹雄・池田和浩・武田健・足立智昭，指定討論者：西浦和樹・柴田理瑛)，名古屋

平野幹雄 (2015)．東日本大震災後にある心理学者が経験した心の変容過程—喪失体験から今日に至るまで—．国際ロータリー第2800地区第24回インターアクト年次大会講演．山形．

### 謝辞

本センターのこれまでの事業を行うにあたって、小谷英文国際基督教大学(ICU)名誉教授(本センター・オーガナイザー)を始めとするICUおよびPAS心理教育研究所の先生方のご尽力に心から感謝申し上げます。また、本年度のEJセンターの運営にあたり、仙台青葉ライオンズクラブ様、静岡青葉ライオンズクラブ様、京都北ライオンズクラブ様から多額の助成金をいただきましたことを心から感謝申し上げます。